



# 鉄 齋

## 山 水 画

会 期

2月17日(水)～4月24日(日)

月曜日休館

但し 3月21日(月)は開館 3月22日(火)は休館

## 山水画の理念

東洋画のあらゆる絵画様式の発生と展開については、古代中国にこれを求めるのが当然であるが、ここにいう山水画の分野も例外ではなく、すでに唐代、張彦遠が『歴代名画記』で「山水樹石を画くを論じ」て以来、その内容や表現形式の問題は、常に絵画制作上の中心的な命題として、かの地で延々と語られてきたところである。中でも今に至るまで重きを置かれ、かつあまねく信奉されている山水画論は、北宋の郭思が、山水画の名手であった父郭熙の言をまとめたという『林泉高致』なる文集のうちの「山水訓」で、その論旨はきわめて解り易く、しかも基本的であるために、従来しばしば引用されてきた。そこで断片的ながらその要点を摘記してみたい。

「君子の、かの山水を愛する所以のものは、その旨いづくにある。丘園に素を養うは常に処るところなり。漁樵の隠逸は常に楽しむところなり。塵囂の韞鎖（俗世間のしがらみ）は、これ人情の常に厭うところなり、煙霞の仙聖は、これ人情の常に願うも、見るを得ざるところなり」という書出しで始まるこの論は、まず、君子が山水を愛する根本の理由と



して、俗世から離れて自然とともにある楽しみを挙げ、ひいては煙霞の彼方にすむという仙人・聖人を憧れるものの、それは願っても見ることのできない存在である、と説き起しているのである。ついで議論は、人間の一身を潔よく保とうとすれば、出でて仕えるか退いて山野に隠れるかの進退をば、節操をもって決すべきこと等を挙げるのだが、そこで、「今、妙手を得て鬱然としてこれ（山水画）を出せば、いながらにして泉岳をきわめ、山光水色、滉漾（水気の深く広いようす）として目を奪わん。これ、世の山水画を貴ぶ所以の本意なり」——つまり、名筆家がみごとにその風景を描き出せば、見るものはいながらにして山の光や水の色に目を奪われるであろう、それが山水画を尊重する本来の意味なのだ、といているのである。続けてその画法についても次のように教える。

「山川に即してこれをとらば、すなわち山水の意趣あらわる」（実際に山や川にわけ入って自然に接すれば、山水の真の姿が現われてくる）。「山水の川谷はこれを遠望してその勢いを取り、これを近看して以てその質をとる」（遠くからみてその全体の形や勢いを知り、近くからみてそのこまかいなりたちを会得する）。

更に、「山水の雲気は四時同じからず」とし、その気配は「春山は澹冶にして笑うがごとく、夏山は蒼翠にして滴るごとく。秋山は明浄にして粧うがごとく、冬山は惨淡として睡るがごとく」ともいう。そして

結論的には、「画を見て、人をしてこの意を生ぜしむること、真に山中にあるが如し、これ画の景外の意なり。青烟の白道を見ては行かんことを思い、平川の落照（夕日）を見ては望まん（その場へ行って眺めたい）ことを思い、幽人山客を見ては居んことを思い（同じく山中閑居したい）、泉石を見ては遊ばんと思う。この、画を見て人をしてこの心を起さしむること、真にその所に即かんとする（本当にその場所に居る気持ちにさせる）、これ画の意外の妙なり」としているのである。この何ゆえに山水画が存在するかを問い、自然との一体感を答えとする考え方こそ、視覚的な喜びに絵画の美を求め、写実的な正確性と色彩の再現に追求を惜しまなかった西洋画と一線を劃する理念であり、東洋の風景画に一貫する原理にほかならないのであった。

以上の論を原典とすれば、降って明代の董其昌は、当人が書画の大家であり、当代芸林随一の存在であったことから、その山水画に対する発言は、より説得力を伴って後世に伝えられている。

『画禅室随筆』の中で語られている次の言は前代からの画論を多分に敷衍したものではあるが、より具体性に富んだものとして人口に膾炙している。

「画家の六法、一に気韻生動なり。気韻は学ぶべからず。これ生まれながらにしてこれを知る、自ら天授あり。然れどもまた学びて得るところあり。万卷の書を読み、万里の路を行き、胸中より塵濁を脱去せば、自然丘壑、内に営まれ、鄞鄂（輪郭）を成す。手に随って写生せば、みな山水の伝神たらん」。

この解説の要もないほど明快な方法論——万卷の書を読み、万里の道を行く——を忠実に起こった人としては、後にも先にも鉄斎を措いては考えられないであろう。いいかえれば董其昌が画家の六法のうち最も古典的な気韻生動を引き、それは天性のものであるとしながらもまた学ぶべき道を指示して後、これを最も鮮烈に実証してみせたのが鉄斎ということができ、鉄斎の山水画の重要な意義もまた、そのあたりに存するのである、といえそうだ。

よく知られているように、鉄斎はこよなく旅行を愛し、その足跡はおよそ全国各地、北海道から鹿児島にまで及んでいるが、交通不便な明治時代として、それはまさしく驚異的な精力であった。鉄斎の目的の一つには、それぞれの地方の名跡を訪ねて歴史や地理を調査したり、或いは歴史上の人物の遺跡の顕彰を計ったりすることが挙げられているが、かたがた、それらの地方が語る古くからの山容や池辺の姿、それに伝統行事なども、人間が自然と交わり、或いは交わる以前からの自然の摂理が内包する何ものかとして鉄斎に啓示を与えたに違いない。それは時には「真景」として描かれ、時には「風俗」として描かれ、



61 石翁道遠圖

やがては「胸中の丘壑」として画面に定着して行ったのである。鉄斎の山水画には、したがって中国画論の教示するものの発現が、随所にみられるのも当然であろう。だが鉄斎は、自作について「読書万卷、千里を行くも愧ずらくは我未だ画祖師とならず」(No.58「名所十二景図」・69歳)と述べている。まことに画業の道は深く長いものと感じざるを得ない。

古来多くの文人画家はひとしく山水画をこそ自らの精神表出に最も適したものと信じ、長い時代に亘ってこの分野の深化に腐心し、かずかずの名作をのこしてきた。鉄斎もまた、山水にはじまり、山水にその真骨頂を得た、本質的な文人画家のひとり、それも独歩の道を選んだ大画家であったといえるだろう。今回の展示では、その本質の流れの如きものをその変化発展のうちに窺うが、これを表わされた画面からみれば、大体次のようにいうことができる。すなわち、その緒において、それはむしろ繊細に傾き、形似は軽妙ながらや・単調であり、先人の筆法の影響も感じられる(たとえばNo.32「山居掃塵図」・40歳代)。だが50歳ごろから70歳にかけての、いわゆる鉄斎自身の画風が確立したとされる時代の作(同No.61「石翁逍遙図」・74歳)には、水墨にしる、着彩にしる、面の如き筆致と太々とした線が加わり、密度あくまでも高く、重厚さとともに迫力が増してくる。中国的な諸々の画法などもすべて消化され尽し、大胆な画面構成をみせるに至る。作品として屏風や襖絵のような大画面が精力的に生み出され、それに色彩の豊かさ、意外性を誇るような作品が多くみられるのもこの頃である。最後の十年間、つまり80歳代は、鉄斎が到達した、独特の風韻をもつ自由奔放さが本領として発揮された時期で、しかも及び難い格調の高さが特徴的である(同No.78「山高水長図」・83歳)。やがてそれは晩年の彩管を駆使したというよりは、すでに心の赴くままに画面に遊ぶ鉄斎そのものの表出につながるのだが、そこでは色彩は抑えられ、しかも僅かに残されたそれは墨色のうちに愈々存在感を強め、錯綜する多くの墨色また微妙に、あるいは一種の破調のもとに「山水」を駆けめぐるに至る。そしてこの時期、最も多く描かれたのはついに仙境図であって、この晩年の鉄斎は、まさしく中国千年の昔に理想とされた「君子の山水を愛する所以」の場所へ帰ったのである。



78 山高水長図

(村越英明)

# 《出品目錄》

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
1	懷趣・清娛	1867 (慶応3)	32	(各) 8.8×13.4	紙本墨書・淡彩	画帖
2	山中訪友	1868 (慶応4)	33	133.4×30.0	絹本 淡彩	掛軸
3	四季山山水	1868 (明治元)	33	(各) 137.8×62.0	紙本 淡彩	二曲屏風一雙
4	四家近青山	1869 (明治2)	34	126.8×63.5	紙本 水墨	掛軸
5	米點山水	1869 (明治2)	34	173.6×97.5	紙本 水墨	掛軸
6	蜀山晚霽	1870 (明治3)	35	118.0×40.2	絹本 淡彩	掛軸
7	四季山水	不詳	30代	(各) 31.4×42.3	紙本 淡彩	掛軸
8	漁舟倚岸	不詳	30代	134.0×48.0	紙本 淡彩	掛軸
9	江山雪霽	不詳	30代	130.0×41.7	紙本 淡彩	掛軸
10	深溪幽澗	不詳	30代	146.7×36.3	紙本 淡彩	掛軸
11	富士畫東久世通禮贊	不詳	30代	30.4×70.6	絹本水墨・墨書	額装
12	峰巒明秀	不詳	30代	130.0×49.5	絹本 水墨	掛軸
13	林巒秋色	不詳	30代	134.3×50.9	紙本 淡彩	掛軸
14	秋山深趣	1871 (明治4)	36	157.0×49.0	紙本 水墨	掛軸
15	溪山真趣	1874 (明治7)	39	178.3×60.0	紙本 淡彩	掛軸
16	竹林幽趣	1874 (明治7)	39	133.7×40.0	絹本 淡彩	掛軸
17	溪山真趣	1875 (明治8)	40	147.9×79.0	紙本 淡彩	掛軸
18	我淡愛彩	1877 (明治10)	42	163.8×52.2	紙本 着色	掛軸
19	淡彩山景	1878 (明治11)	43	149.7×68.0	紙本 淡彩	掛軸
20	妹勢山真景	1879 (明治12)	44	122.3×33.2	紙本 淡彩	掛軸
21	空翠濕衣	不詳	40代	144.2×78.5	紙本 水墨	掛軸
22	溪山清風	不詳	40代	145.0×39.5	紙本 淡彩	掛軸
23	青山山隱	不詳	40代	155.7×40.9	紙本 淡彩	掛軸
24	青層山隱	不詳	40代	146.6×58.2	紙本 水墨	掛軸
25	層巒積翠	不詳	40代	138.1×40.2	紙本 水墨	掛軸
26	竹林銷夏	不詳	40代	146.6×38.4	紙本 淡彩	掛軸
27	竹東幽居	不詳	40代	150.0×51.5	紙本 淡彩	掛軸
28	晚山閑居	不詳	40代	140.5×56.0	紙本 淡彩	掛軸
29	耶馬山溪	不詳	40代	(各) 22.1×17.0	紙本 水墨	画帖貼交
30	野山	不詳	40代	19.0×336.0	絹本 着色	卷子
31	吉野山	不詳	40代	129.0×51.0	紙本 淡彩	掛軸
32	山居掃塵	不詳	40代	146.0×34.0	紙本 着色	掛軸
33	溪山無盡	1881 (明治14)	46	14.3×46.6	紙本 水墨	扇面額装
34	秋山暮雲	1882 (明治15)	47	129.0×50.0	絹本 淡彩	掛軸
35	層巒烟雨	1882 (明治15)	47	155.2×41.4	紙本 淡彩	掛軸
36	竹溪觀瀑	1882 (明治15)	47	130.7×48.0	紙本 淡彩	掛軸
37	真愛山居	1884 (明治17)	49	136.0×50.5	紙本 水墨	掛軸
38	溪山真趣	1889 (明治22)	54	158.8×65.3	紙本 淡彩	掛軸
39	英雄肥遯	不詳	50代	135.2×33.6	紙本 淡彩	掛軸
40	溪山雪霽	不詳	50代	139.5×38.7	紙本 淡彩	掛軸
41	江山清遠	不詳	50代	24.0×71.0	紙本 水墨	扇面額装
42	深山溪谷	不詳	50代	174.6×96.0	紙本 水墨	掛軸
43	仁者樂山	不詳	50代	159.0×61.0	紙本 淡彩	掛軸
44	田園閑居	不詳	50代	135.6×49.3	絹本 淡彩	掛軸
45	梅山秋葉	不詳	50代	33.5×125.0	絹本 着色	額装
46	園風詩意	1893 (明治26)	58	(各) 135.6×49.2	絹本 着色	掛軸
47	野亭遊客	1894 (明治27)	59	180.8×96.9	紙本 水墨	掛軸
48	碩儒對話	1896 (明治29)	61	138.5×52.0	絹本 着色	掛軸
49	富士山	1898 (明治31)	63	(各) 153.0×352.5	紙本 着色	六曲屏風一雙
50	雲山怡情	不詳	60代	120.2×51.0	紙本 淡彩	掛軸
51	看山清福	不詳	60代	143.8×52.3	紙本 水墨	掛軸
52	溪山勝概	不詳	60代	187.2×99.9	紙本 水墨	掛軸
53	溪山真樂・天空海闊	不詳	60代	(各) 155.2×362.5	紙本 着色	六曲屏風一雙
54	山水貼交屏風	不詳	60代	(各) 131.0×51.4	絹本 着色	六曲屏風一雙
55	卓筆・錦帶橋	不詳	60代	(各) 22.8×52.5	紙本 淡彩	掛軸
56	富士山	不詳	60代	16.3×53.4	紙本 着色	扇面額装
57	幽境無塵	不詳	60代	130.3×51.3	紙本 淡彩	掛軸

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
58	名所十二景図	1904 (明治37)	69	(各)138.0×51.9	紙本 着色	六曲屏風一双
59	梅澗煮茶・層巒秋霽図	1907 (明治40)	72	(各)126.5×42.9	絹本 着色	掛軸
60	豪溪真景図	1907 (明治40)	72	154.0×30.6	紙本 淡彩	掛軸
61	石翁遺逸図	1909 (明治42)	74	135.0×48.6	紙本 淡彩	掛軸
62	看山自適図	不詳	70代	116.8×42.2	絹本 着色	掛軸
63	春秋声賦意図	不詳	70代	141.5×69.7	紙本 淡彩	掛軸
64	対月鼓琴図	不詳	70代	126.4×42.2	絹本 着色	掛軸
65	茂松清泉図	不詳	70代	129.0×60.0	紙本 淡彩	掛軸
66	耶馬溪図	不詳	70代	71.3×94.5	紙本 淡彩	掛軸
67	名士帰山図	1911 (明治44)	76	144.7×36.5	絹本 着色	掛軸
68	武陵桃源事談	1912 (大正元)	77	130.1×45.0	紙本 着色	掛軸
69	清名家放舟図	1914 (大正3)	79	17.0×271.0	紙本 淡彩・墨書	巻子
70	清溪幽趣図	1914 (大正3)	79	130.5×33.2	紙本 淡彩	掛軸
71	梅山幽趣図	1915 (大正4)	80	130.0×42.0	絹本 着色	掛軸
72	溪山競秀図	1916 (大正5)	81	(各)29.6×21.5	紙本 着色・墨書	画帖
73	大瀑図	1917 (大正6)	82	144.2×87.0	絹本 水墨	掛軸
74	撥雲訪友樵図	1917 (大正6)	82	133.2×31.4	紙本 淡彩	掛軸
75	幽溪帰邨婦図	1917 (大正6)	82	129.6×32.5	紙本 淡彩	掛軸
76	大柳原陰漁楽図	1918 (大正7)	83	141.8×52.1	絹本 着色	掛軸
77	山高水長図	1918 (大正7)	83	141.7×41.8	絹本 着色	掛軸
78	東瀛松清泉図	1918 (大正7)	83	142.6×51.3	絹本 着色	掛軸
79	茂松清泉図	1918 (大正7)	83	74.9×85.8	絹本 着色	掛軸
80	東瀛神景図	1919 (大正8)	84	153.5×51.1	絹本 着色	掛軸
81	鞆川雪景図	1919 (大正8)	84	133.6×64.4	紙本 淡彩	掛軸
82	東瀛神景山雨図	1920 (大正9)	85	132.5×42.0	絹本 着色	掛軸
83	瀟湘暮雨図	1920 (大正9)	85	131.0×32.3	紙本 水墨	掛軸
84	勞勳生活水図	1920 (大正9)	85	134.5×34.0	紙本 淡彩	掛軸
85	山居静適図	1920 (大正9)	85	径 57.0	紙本 墨画	掛軸
86	山居静適図	1920 (大正9)	85	113.6×47.6	紙本 水墨	掛軸
87	笑傲煙霞境図	1920 (大正9)	85	173.0×46.9	紙本 水墨	掛軸
88	瀟湘僊境図	1921 (大正10)	86	130.5×32.1	紙本 淡彩	掛軸
89	頼氏山紫水明荘図	1921 (大正10)	86	28.8×41.7	紙本 水墨	掛軸
90	小化城図	1922 (大正11)	87	17.8×55.0	紙本 水墨	扇面掛軸
91	如南山之寿図	1922 (大正11)	87	131.3×32.5	紙本 水墨	掛軸
92	心遊仙境界図	1922 (大正11)	87	131.9×33.7	紙本 着色	掛軸
93	南海普陀山図	1923 (大正12)	88	130.8×65.0	紙本 水墨	掛軸
94	層巒僊閣図	1923 (大正12)	88	146.5×40.3	紙本 水墨	掛軸
95	東坡居士江山詩意図	1923 (大正12)	88	53.4×64.0	紙本 墨画	掛軸
96	梅華書屋図	1924 (大正13)	89	145.6×40.1	紙本 着色	掛軸
97	弘法大師在唐遊歴図	1924 (大正13)	89	132.9×33.3	紙本 淡彩	掛軸
98	君子清遊図	1924 (大正13)	89(90)	144.5×40.5	紙本 淡彩	掛軸
99	溪居誦書図	1924 (大正13)	89(90)	145.1×39.1	紙本 淡彩	掛軸
100	扶桑神境図	1924 (大正13)	89(90)	144.5×39.3	紙本 着色	掛軸

出品作品は期間中下記の通り三回にわけて展示いたします。

但し一部作品は重複することがあります。

第一回 2月17日(水)～3月6日(日)

第二回 3月8日(火)～4月3日(日)

第三回 4月5日(火)～4月24日(日)

鉄齋美術館 〒665 宝塚市清荒神清澄寺山内 電話 宝塚(0797)84-9600  
昭和63年2月15日 印施